

世界シェア9割から ほぼ消滅の波乱万丈

日本のアロマテラピーの幕開けは訊本が刊行された1985年(昭和60年)と言われますが、アロマテラピーの知識も精油も輸入物の文化と思っているなら大きな間違い。世界に輸出するほどの産地だった「日本の精油」がありました。ここ数年ブームになっている「ハッカ油」も、日本は世界シェアのトップを誇る生産国でした。

ペパーミントを蒸留することで得られるのは、精油と副産物の芳香蒸留水ですが、日本薄荷は蒸留して得られる粗油を「取卸油」と言い、ここからメントールの結晶である「薄荷脳(メントールクリスタル)」が作られます。薄荷脳を取り出した後の脱脳油が「ハッカ油」で、何とこちらが副産物になるのです。もちろん芳香蒸留水も得られますが、主目的が薄荷脳なのでほとんど廃棄処分となるようです。

日本の薄荷の歴史を辿ると、古くは平安時代から生薬・漢方薬としてテラホラ登場します。本格的な栽培と加工は1817年(文化14年)、備中門田(現在の岡山県総社市)にて江戸から持ちこまれた苗で始められます。明治19年には門外不出であった薄荷草が株分けされ栽培地が拡大、その後全国的に広がりを見せます。明治30年代後半から大正時代は、岡山県と広島県が



北海道外持ち出し禁止の幻の和ハッカ「北海JM23号」



「FlowerTea+Farmer」(福岡県)で栽培される「博美」系統。

一年中使える和のハッカ

「薄荷」の正しい 選び方、使い方

選び方、使い方

日本ではすでに平安時代から使われていた薄荷。

近年では、西洋のものに比べてシャープな香りの「和ハッカ」が注目を集め、一時は店頭から消えるほど。とはいえ、実はハッカのクオリティは、玉石混交なのが実情。我が国における薄荷生産の歴史や有用性など、

知っているようで知らなかった薄荷の魅力を知り、「薄荷」を正しく選んで使えるようになりましょう。

重松浩子

◎ 文 Jスタイルアロマ研究所代表



重松浩子さん

しげまつひろこ Jスタイルアロマ研究所代表。英国ITEC認定アロマセラピスト。日本でアロマテラピーが広く知られる前からアロマを学び実践している。「日本人に合うアロマ」を研究し、産地と消費者をつなぐ「日本の精油」の普及に力を注ぐ。著書に『はっか油で楽しむ暮らしのアイデア』(玄光社)ほか。

